

# 論 説

## 地域の力を生かし、未来を切り開くキャリア教育に向けて ～キャリア教育コーディネーター・NPOの活用のおすすめ～

NPO法人アスクネット理事・教育コーディネーター <sup>めんじょう</sup> 毛受 芳高

### 1. はじめに

本論説のタイトルにある「キャリア教育」という言葉も、まだあまり聞き慣れていないにも関わらず、新たに「キャリア教育コーディネーター」や「NPO」などという言葉が加わってくると、さらにわけがわからないものを感じるかもしれない。

しかしながら、現在の学校教育が直面している課題のひとつの解決の方向性として位置付けられたテーマが「キャリア教育」であることを考えると、それを単なる絵に描いたモチにおわらせず、効果的かつ持続的に、学校現場に過重な負担をかけることなく、地域を巻き込んだキャリア教育の実践を構築していくために必然的に生まれる仕組みが「キャリア教育コーディネーター」というものである。

キャリア教育コーディネーター、そしてキャリア教育コーディネーターの活動基盤であるNPOは、その数も全体の学校に比しては、まだまだ少数ではあるものの、その効果については立証されつつあり、キャリア教育の実践の広がりにあわせて、その活用事例も増えており、その認知と必要性の理解は広がっている。

本稿では、今、教育現場が直面している問題に対して、学校と地域、そして、それらをうまくつないでいく「キャリア教育コーディネーター」がどのように学校を支援し、具体的な実践にむすびつけていくかについて紹介したい。

### 2. 学校教育・工業高校が直面している課題

現代の学校教育が抱えている課題は数多いが、どの地域でも共通して見られる課題が、とりわけ以下の2点である。

① 学習意欲、生きる意欲をどう高めていくか？

学習意欲も含め、将来への夢や目標も含めた生きる意欲が低下した生徒が増えている。キャリア教育に新たに取り組む際に、最も多く寄せられる問題がこの意欲の向上に関するものである。

「生徒のやる気を高めたい」

「将来の目標や夢をもたせ、学習意欲を引き出したい」

「今さえよければよい、という考えから、未来に向けて積極的に学習していくことの大切さを伝えたい」

など、生徒たちの問題に毎日直面する教員からの苦悩がコーディネーターに伝えられる。特に、高校段階になると、「学力偏差値輪切り」の弊害として、この現象は学力中低位校に顕著に現れる。

皆さんの学校ではどうだろうか？ それを半ば「諦め」のように受け入れ、失望することなく淡々と授業をこなしていく状況におかれている。ある教員からは「今の生徒は5無だ」という言葉も聞いた。

無反応…呼びかけても反応なし。  
無関心…よそ見。よそ事。  
無気力…ベタ寝。  
無自信…「どうせバカだし」「どうせ無理」  
を理由に何事にも主体的に取り組まない。  
無秩序…自発的にまとまらない集団。

これが、キャリア教育を取り入れた教育実践で、日頃の学習に意欲的に取り組むようになったらさらによいが、そこまででなくとも、何かの目標をもって生き生きと学校生活に取り組むようになるだけでも、という願いは共通したものといえるだろう。

## ② 社会から求められる能力をどう身につけさせるか

もうひとつの大事な課題が、いわゆる「学力」をはじめ、社会から求められる能力をいかに身につけさせるか、というものである。

「社会から求められる能力」というのが、これまでの高校段階では、次の進路先となる社会、つまり大学や専門学校などに入学するために必要となる「学力」を身につけさせることだけを考えればよかったのが、今はそれだけでは不十分で、意志決定能力、人間関係形成能力、将来設計能力、情報活用能力などに代表されるように、様々な基礎的な力を身につけなければ、「学校から仕事への移行」がスムーズに行かず、就職まで至ることが難しくなっている。特に、工業高校においては、次の進路が会社への就職というケースも多く、学校で培う技術や知識に加えて、社会人としてのマナーやコミュニケーション力、問題発見・解決力や主体性などが、とりわけ不況時の採用数が狭き門になるなかでは、求められるようになってきている。

しかし、「学力」を身につけさせるのはまだ指導できるイメージがわかるが、社会で求められる力をどのように指導するかイメージがわからず、困惑しているケースも見受けられる。

これら学習意欲、能力の育成の課題については、工業高校は普通科教育よりも比較的問題は少ないものの、ある程度共通した課題である。

## 3. 課題解決のための「キャリア教育」と「キャリア教育コーディネーター」

これらの課題の解決のために、教育現場はどうしたらよいただろうか。

学習意欲の向上のために、よりわかりやすい指導を行ったり、部活動や文化祭などの行事を行う中で生徒の自信を高めたり、様々な取組が行われているが、特に、「学校から職業への移行」をより円滑に行うために推進されるテーマが「キャリア教育」である。

### 1) キャリア教育の推進と課題

キャリア教育とは、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育（平成11年中央教育審議会）」と定義され、新学習指導要領においても、総合のみならず、各教科についても職業との関係性をふまえて指導する内容が追加されている。代表的なプログラムである「職場体験」は中学校における実施率が96.5%、高校における「インターンシップ」の実施率は69.1%（平成20年度職場体験・インターンシップ実施状況等調査結果より）となり、ある程度浸透した。他にも、職業人を招いての「職業講座」の実施や、職場体験前の「マナー講座」、校外に出て社会人にインタビュー、商品を企画して販売するプロジェクト学習など、多様な取組が行われている。

しかし、問題はこうしたプログラムを持続的に実施するためには、学校外の多くの社会人や企業の協力を必要とし、依頼や打ち合わせなどを行わなければならない、児童生徒への丁寧な事前事後指導とあわせて行うには、現場の負担感はかなり大きいものがある。また、より効果的なプログラムを構築しようとする、上記負担

感に加えて、これまでの教員の経験にはないノウハウや人的ネットワークも必要となり、どの学校でも持続的に実施できるものにするには、よりきめ細かい支援体制が課題である。

## 2) キャリア教育コーディネーターの活用へ

そこで、キャリア教育推進にかかるこれらの課題を解決するための研究が進んでいるのが「キャリア教育コーディネーター（以下、コーディネーター）」である。

外部の企業や市民を活用した効果的なキャリア教育プログラムを実現していくなかで、各地域のNPO・学校のPTAの有志などがコーディネート機能を自然発生的に担っていくケースがモデルとなり、平成17年から19年までの3年間、経済産業省が「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト」として、全国28地域において地域のNPOや企業にコーディネート機能を委託し、体系的なキャリア教育を推進したところ、地域の特色を生かした様々なプログラムが、小中高の各段階で多様に展開された。この成果にもとづき、平成20年度から3ヵ年、同省は、「キャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業」として、有識者を集めた研究会を立ち上げるなどして、教育コーディネーターの育成・評価システムの研究をスタートし、推進している。

平成20年度にまとめられたコーディネーターの定義とは以下の通りである。

キャリア教育コーディネーターとは、児童生徒の能力を活用する「場」を提供することで、社会的自立に向けた力のはぐきを支援し、学校の学びの中で地域一体となったキャリア教育の実現を促す教育支援人材とする。

つまり、学校現場がキャリア教育を導入しようとする際に、学校の要望を前提にして支援をしてくれる専門家ということである。

コーディネーターが発揮する効果としては、以下の4つ。

### ① 効果的なキャリア教育実現にかかるノウハウの提供

キャリア教育を小中高の各段階でどのように推進したらよいのか、指導の際のポイント、参考になるプログラムの事例などを専門的に学んでおり、教員は、コーディネーターと何度か打ち合わせを行うなかで、キャリア教育の専門書を読んで研究をしなくても、効果的なプログラムの実現ができる。また、その地域の特色を生かしたプログラムの提供も受けられる。

### ② キャリア教育プログラムの実施のための人的ネットワーク提供と調整業務の支援

キャリア教育の支援に積極的な企業や職業講座やマナー講座、生き方や職業観を涵養することができる効果的な講師など、実施にあたってのカギを握る人的ネットワークをコーディネーターは構築しており、学校独自でこうしたネットワークを持たなくとも、効率的に提供を受けられる。例えば、講師を招いて授業を行う場合、より生徒への効果の高いプログラムにするには、講演会形式よりは、クラス単位で講師を招いての講座のほうが、生徒にとっては刺激のある講座になりやすい。となると、1学年6クラスの高校だと同数講師を手配しなければならない。それだけの数、質も高く内容面も充実した講師を自前で揃えるのは難しいが、コーディネーターと協働することで、講師との事前調整や事後のフォローなど調整業務の支援も含めて行ってくれる。講師手配にかけていた時間と労力を生徒への指導や支援活動にかけられるため、教育効果も高められる。

### ③ 地域でのプログラムの共有・普及化や持続性の向上

これまでの場合、1つの学校である教育実践が成果をあげても、他の学校になかなか広がらなかった。その実践に必要な人脈やノウハウが

その学校のみ存在するからだ。しかし、コーディネーターを介すれば、他の学校と共有しやすいので、スムーズに移転できる。また、教員の異動とともに、せっかくつくりあげた教育実践もなくなるケースも多かったが、コーディネーターが媒介することで、その学校でのノウハウや人脈の継承もやりやすくなる。

#### ④ 産業や企業側、学校側の両者にとってバランスのよい運営ができる

キャリア教育を実施する学校、それを支援する企業にも、両者にとって何らかのメリットがなければ、うまくいかない。地域・企業側のメリットに偏ってしまうと、単に採用活動や会社のPR活動の延長のようになってしまったり、学校側のメリットのみに偏ってしまうと、企業側も本来の業務の間に人的コストを割くには持続的には難しい。また、両者の間には、それぞれの考え方や言葉遣いなどに大きな違いがあり、これらをうまく仲立ちし、双方にとって満足のいくものをつくるためには、通時的な役割ができるコーディネーターがいる方がスムーズである。

これら4つが代表的なメリットだが、課題としては、コーディネーターを支える財源的な裏付けがない点で、いくつかの時限的な政策で実施される委託事業、企業が資金提供する「教育CSR」などによって、運営されている。今後、キャリア教育推進の必要性が高まっている以上、コーディネーターの育成・評価・認定システムの整備とあわせて、必然的に全国的に広がっていくと思われる。

経済産業省キャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業HP  
<http://www.human-edu.jp/>

## 4. NPO法人アスクネットが行うキャリア教育コーディネートの事例

NPO法人アスクネットは「キャリア教育コ

ーディネーター」の役割を担っている団体である。『学校等の学びの場』と『地域』をつなぐ仲介役としての機能を受け持ち、企業経営者や様々な経験、技術をもった市民らを巻き込み、効果的な教育プログラムをコーディネートする事例を手がけてきた。筆者が'99年に立ち上げ、2001年にNPO法人化。キャリア教育コーディネーターの草分け的存在で、コーディネーター活用の政策を推進してきた。以下に活動内容をまとめる。

### 1) 市民講師ナビ

様々な学校の教育ニーズにあわせ、その教育目標にあわせた市民講師をコーディネートするというのが「市民講師ナビ」。例えば、「生きることを考えさせたい」というテーマへのリクエストには、「やんちゃ和尚」と呼ばれる、不登校や引きこもりの生徒をお寺で預かる活動をしているお坊さんを紹介したり、「パチプロは仕事か」というテーマで、「楽しく生きるな、楽しく生きろ」のメッセージを伝える「元パチプロ」の青少年施設職員を紹介したりと、学校のニーズや生徒実態に合わせたコーディネートを行っている。こうした単発の講師依頼から、年間のカリキュラムを作成することまで、コーディネーターが支援を行っている。

愛工大名電高校は、スポーツコース1～3年生の総合学習を、「人間学」をテーマに行っているが、年間カリキュラムの策定から、取り組む課題の設定、実際の授業の進行まで、コーディネーターと教師が二人三脚で行っている。(次項 表1参照)

### 2) キャリア教育情報誌『Schan』

情報誌『Schan (エスチャン)』という無料のキャリア教育情報誌を年2回発行し、愛知県内で毎回5万部を高校生に配布している。これは、高校生が、社会で活躍する様々な人びとにインタビューすることで、キャリア教育になる。それと同時に、この雑誌を配布することで、生

回	日程	内 容
1	4/22	オリエンテーション
2	5/13	セルフイメージマップ
3	5/20	セルフイメージマップ
4	5/27	セルフイメージマップ
5	6/3	モチベーション講座
6	6/10	市民講師生き方講座
7	6/17	コミュニケーションワークショップ
8	6/24	インタビュー学習講座
9	7/1	感想・振り返り
10	9/2	2学期オリエンテーション
11	9/9	インタビュー先について調査
12	9/16	インタビュー当日の流れ・マナー
13	10/14	28日インタビューのアポイント
14	10/28	訪問先でのインタビュー①
15	11/4	振り返り・感想交流
16	11/11	外部講師によるレクチャー
17	11/18	インタビュー先での調べ学習
18	11/25	訪問先でのインタビュー②
19	12/2	振り返り・お礼、発表練習
20	1/13	思いを伝えるプレゼン講座
21	1/20	プレゼン準備
22	1/27	模擬プレゼンテーション
23	2/3	最終発表会
24	2/10	市民講師生き方講座
25	2/24	振り返り・発表

表1 愛工大名電高校「総合人間学」年間カリキュラム  
 きる情熱や仕事についての考えにふれ、普段なら目にしないような内容であっても、身近な生徒が出ていることで親近感がわくため、より多くの生徒たちに「仕事」について考えるきっかけを提供している。

<http://www.ask-net.jp/sch/>

### 3) 教育CSR

「教育CSR」という企業が支援する教育プログラムの推進

も行っている。例えば、小学校5、6年生の理科の単元に、企業の様々な技術を活用する授業づくりを行っている。小学校5年生の「ものの溶け方」の単元で、お菓子のパッケージなどを印刷する企業は、インクにおける「水性と油性の違い」や「物が溶けるとはどういうことか」など、実験を交えた授業を行う。児童にとっては、普段なにげなく接しているお菓子の袋に、



理科で学んでいる内容が関係していることに気付くと同時に、企業の様々な技術者と触れあう機会にもなる。

#### 4) 愛知県・人材育成コーディネート推進事業

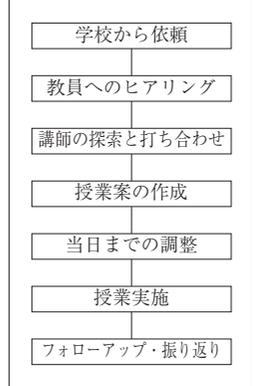
厚生労働省のふるさと雇用再生特別基金を活用して、愛知県が行う事業で、公立高校でのキャリア教育をコーディネートする人材を採用・育成し、高校のキャリア教育の推進を担っている。平成21年度は9名を採用し、事業は3年間継続する見込みだ。採用された9人のコーディネーターは県内40校の高校からの様々なキャリア教育の要望に対してコーディネートを行っている。コーディネートのフローチャートはおおよそ図1の通りである。

#### ＜工業高校でのコーディネートの事例＞

上記事業のなかで、ある工業高校から受けた事例を紹介する。「板金塗装を教えてくれる講師はいるか？」との依頼がきた。だからといって、板金塗装の技術指導者を探すだけではダメである。教員への

ヒアリングを行い、詳しい条件とともに、「なぜ板金塗装を教えたいのか?」、「授業を通して生徒にどうなってもらいたいのか」などの狙いを理解する。全体としては3時限を2日間で計6時限をワンセットとして、生徒を変えて3セット分の授業。それだけの分量の授業を担ってもらえる板金塗装の技術者で、技術指導とあわせて仕事の面白さや技術を高めることの大切さなどをうまく教えられる講師は稀である。しかし、コーディネーターがもつ広い人的ネットワークの中から、教育に理解がある企業で自動車業を営んでいる人を探し出し、相談をすると「ぜひ協力したい」との返答。打ち合わせに出

図1 コーディネートの流れ



掛け、板金塗装の技術や仕事の面白さなどヒアリングし、コーディネーターが授業案をまとめる。その授業案をベースに教員との調整をすすめ、実際の授業に至る。生徒たちは、講師が、なぜその仕事についたかのストーリーや板金塗装に試行錯誤で取り組む話とあわせて、実習を行う。実際に自動車を凹ませてみて、学んだ技術できれいに直す体験をする。途中で挫折する生徒もいるかと思いきや、もとのように直せる喜びに夢中になっていたようだった。仕事がつまみ、技術を磨くことで見える充実感を教える授業をつくることができた。

## 5. キャリア教育から見える教育の未来

キャリア教育をコーディネートするなかで見えてくる未来について最後にまとめる。

- 1) キャリア教育は単に生徒のためだけのものではない。市民が関わることで、市民も成長できる貴重な機会になる。

講座をコーディネートしていて確信するのは、教える人自身にとっても成長する経験になるということである。特に、職業講座などで自分の仕事について、「なぜその仕事についたのか?」「その仕事の喜びとは何か?」を伝えようとすれば、必然的に深く自らの仕事について考えることとなり、それは下手な研修を受けるよりもずっと優れた研修となる。市民講師を経験した人は口々に、「生徒に教えるつもりが、自分が勉強になった」と言う。これからは、市民は児童生徒に関わることが喜びとなり、教えることで学び楽しむ時代がくるのではないか。

- 2) 小中高大を縦断した人材育成の全体の戦略づくりが不可欠

不況のなかでこそ人材育成に投資をし、力を注がなければいけないことは当然だ。しかし、そこで投資された子どもたちが成長し、社会の中で働けるようになって初めて、経済は動き、投資した資金が回収され、また教育に戻っていく。こうした循環の設計なくしては、人材投資

は持続不可能である。しかし、今のように、小中高大、そして社会とぶつ切りになっていては、具現化は困難である。全体を通した仕組みを構築していくことが不可欠であり、コーディネーターは、キャリア教育というものを小学校から大学まで関わるができる立場を生かし、地域の人材育成の効果的な流れづくりに資することができるのではないか。

- 3) コーディネーターの役割とはコンピュータの世界ではOSの機能。これからの教育の標準的な機能へ。

コーディネーターの役割をITの世界でたとえるならば、ウインドウズなどオペレーティングシステム（以下「OS」）に相当する。OSがない時代は、プリンターやスキャナーなどのリソース（資源）を活用するのに、それぞれプログラムごとでの対応が必要だった。それでは非効率だからと、各リソースを媒介するOSというものが生まれた。同様なことが教育の世界でも起こっているのだ。市民講師や企業といった様々な外部のリソースを活用するためのOSが標準機能として装備されれば、学校の先生たちは外部のリソースを取り入れたよいプログラムを自由に開発できるようになるだろう。「コーディネーター」というものが生まれたのは、外部の教育資源の活用が当たり前になれば、当然の帰結である。

つまり、これからの教員は、児童生徒を育てるという問題を社会全体で取り組むことで、教育効果が高まると同時に、関わる市民・企業にとっても成長・豊かさを育むことができる事実を認識し、教育問題を「あえて」学校の中で結させない工夫が求められるのである。

遅かれ早かれ、「キャリア教育コーディネーター」は皆さんの身近にやってくるはずであり、そのときには、ぜひ積極的に依頼をし、活用してほしい。